

# 素朴理論から見る認知形態論\*

萩澤大輝

hagisawa\_daiki@yahoo.co.jp

キーワード： 認知言語学 形態論 レキシコン 素朴理論

## 要旨

本稿は形態論上の概念である語種、形態素、構成素構造、派生関係を検討する。これらは学習可能性や不確定性などの問題を抱えている。これを解決するには、認知言語学で周知の道具立てに加えて素朴知識・素朴理論という概念を援用するのが有効である。専門知識と素朴知識を区別し、使用基盤モデルの考え方に則り個人差のある言語知識を積極的に認めることで、問題を自然に解消することができる。

## 1. はじめに

本稿は日英語のデータをもとに、派生形態論に関わる概念を認知言語学的に検討する。説明の道具立てには比較的好く知られたスキーマ化、カテゴリー化などに加えて素朴理論の考え方を援用する(詳細は3.2節)。核となる主張は次のようにまとめられる。

- (1) 語種、形態素、構成素構造、派生関係は所与の客観的概念ではなく、個々の話者が素朴理論に基づいて発見する産物と考えるのが妥当である。したがって、専門知識と素朴知識のずれや話者間の認識の相違は存在が自然に予測されるものであり、問題ではない。

議論に入る前に前提と方針を明確にしておく。第一に、本稿が依拠する認知言語学は一般的な認知能力との関わりという点から言語の解明を目指している(Langacker 2008)。したがって言語現象だけを見るのではなく言語外の現象との接続を図ることにする。第二に、言語知識は具体的な使用から立ち上がるという使用基盤モデルを採用して議論を進める(Langacker 2000)。そのため、運用レベルの問題として却下されるような例も正当なデータとして採用される。第三に、説明の対象は現代の一般的な母語話者の知識とする。そのため普通の話者が直接には知りえない情報をそのまま言語知識と見なすことは避ける。

全体の構成は次の通りである。2節は議論の背景として、派生形態論の基本概念およびそれが抱える諸問題を概観する。3節では認知言語学の紹介および素朴知識・専門知識の導入を行う。

---

\* 本稿の執筆にあたり西村義樹先生より貴重なコメントをいただいた。また野中大輔、田中太一、氏家啓吾の各氏とは何度も議論を重ね、大いに刺激を受けた。記して感謝する。

4節ではこれらをもとに問題が解消されることを示す。5節は議論のまとめである。

## 2. 形態論の基礎概念

### 2.1 語種

語種ないし語彙層とは出自に基づいた語の分類をいう (木村ほか 2012: 25)。日本語であれば和語・漢語・外来語の3区分ないしオノマトペを加えた4区分が一般的である。英語でも本来語と外来語が区別できる<sup>1</sup>。次に見るように語種は多彩な現象に関与する。

#### (2) 連濁が生じるのは和語

- a. 初心者 + 殺し ><sup>OK</sup> 初心者ごろし
- b. 初心者 + 講習 > \*初心者ごうしゅう
- c. 初心者 + コース > \*初心者コース (cf. バンスほか 2017: 5ff.)

#### (3) 接辞「お-」は和語、「ご-」は漢語

- a. お名前、おところ、お仕事
- b. ご氏名、ご住所、ご職業 (益岡・田窪 1992: 221)

#### (4) 与格交替を許すのは本来語

- a. John {gave / donated / presented} a painting to the museum.
- b. John {gave / \*donated / \*presented} the museum a painting. (Pinker 1989: 45)

#### (5) 外来接辞は本来語に付加できない

- a. <sup>OK</sup>calm-ness      \*calm-ity
- b. <sup>OK</sup>home-less-ness      \*home-less-ity (Don 2014: 55)

こうした現象がある以上、何らかのかたちで言語知識となっていると考えられるが、個々の語について語種を逐一明示的に教わることはない。[+Linate] などとの表記で素性扱いつことも多いが、それを単なる説明の道具立てではなく言語知識と見なすのであれば、どのように学習するのか説明が必要である (Plag 1996: 778)。

また、語種による一般化には例外がある。小綺麗、いろはガルタなど和語ではないのに連濁を起こす語もあれば、*talkative* や乙女チックなど外来接辞が本来語に付く例もある<sup>2</sup>。こうした学習可能性や例外の存在が語種に関する問題である。

<sup>1</sup> なお *ask / question / interrogate* などの類義語ではゲルマン系 / フランス系 / ラテン・ギリシャ系という3層が認められる (Bauer et al. 2013: 35-36)。

<sup>2</sup> 英語における語種と接辞の分布の相関は「順序づけ仮説」として知られるが、その反例についてのデータは Bauer et al. (2013: 583-615) に詳しい。なお (5) で挙げた *-ity* 自体にも *oddity* という例外がある。

## 2.2 形態素認定

音韻論が音素を研究対象とするように、形態論で研究の主たる対象となるのが形態素である。『明解言語学辞典』では「意味を表す最小の単位のこと」という標準的な定義がなされている(斎藤ほか 2015: 57)。これに加えて、ふつう形態素の認定にあたっては余すことなく有意な要素に切り分けることが条件とされる。これを完全分解性 (exhaustive segmentability) と呼ぶ(Gundersen 2001: 96, Schmid 2015b: 3)。たとえば *unfair* は「否定」を意味する *un-* と「公平な」を意味する *fair* とに切り分けられるが、おのおのこれ以上の分解ができない(すなわち最小) かつ無意味な要素を残すことなく切り分けているため、いずれも形態素と見られる。ここまでは特に問題ない。

ところが判断の難しい例も出てくる。*Wednesday* の *day* やビー玉の「玉」は有意な最小要素として取り出せるように思えるが、これらを形態素と認めてしまうと *Wednes* や「ビー」という意味をなさない残余が生じる。上で触れた完全分解性を満たさないのである。こうした事例の扱いについて影山は次のように述べている。

- (6) 現代語としてどこまでを形態素として認定するかは困難な問題である。「えげつない」を「えげつ」と「ない」に分けると、「えげつ」は意味のない形態素ということになり、定義上の矛盾が生じる。また、「ビードロ玉」を省略した「ビー玉」のような場合、「ビー」だけを形態素とすること自体が妥当でない。このような例は形態素に分析せず、「えげつない」「ビー玉」全体を1語として扱うほうが合理的である。(影山 2005: 569)

これはこれでひとつの立場だが、ビー玉が「ビー」と「玉」で切れそうだという直感は取りこぼしている。おそらく影山自身を含め「ビー」にビードロという由来を正しく認識している話者や、「アルファベットのBだろう」などと誤って思い込んでいる話者もいるだろう。さらに「自分では同定できないが何かしら意味があるのだろう」程度の認識をしている話者も多いと思われる。こうして有意な最小の要素という規定は「有意とは誰にとってか」という問いを生むことになる。

## 2.3 構成素構造

言語表現における要素のまとまりは構成素と呼ばれ、その階層を捉えた構成素構造は括弧で表示される。文が単なる線状的な連鎖でないように、語内部にも階層構造を考える必要がある。これは構造的曖昧性をもった語の存在から分かる。

- (7) 語レベルの構造的曖昧性

- a. [lock] / [施錠する] > [un-[lock]] / [解錠する] > [[un-[lock]]-able] / [解錠できる]
- b. [lock] / [施錠する] > [[lock]-able] / [施錠できる] > [un-[[lock]-able]] / [施錠できない]

ところが括弧づけのパラドクス (bracketing paradox) という例の存在が指摘されている。いくつかの種類現象がこの名で呼ばれるが、ここでは同一の語に対して複数の構成素構造が想定される状態をいう。たとえば次のような例を考えよう。

- (8) a. [[[un-[true]-th]-ful]                    [un-[[[true]-th]-ful]]                    [[un[[true]-th]]-ful]  
 b. [under-[[cook]-ed]]                    [[under-[cook]]-ed]

それぞれ「真実でない」「調理が不十分な」という全体としての意味にたどり着くという点でほぼ等価な構造が少なくとも2-3通り考えられ、一意に定めるのは困難である (Dixon 2014: 4, 野中・堀内 2016: 197)。なぜ複数の取り方が可能である状態が生じるのか、そもそもそれはパラドクスなのか。こうした点が十分に明らかでない。

## 2.4 派生関係

最後に派生関係を考える。ここでいう派生は屈折と対比される概念で、新たな語彙素を作り出すプロセスをいう。ある二語間に派生関係があるというとき、そこには非対称的な方向性が想定される。もともとなる形式を語基と呼ぶと、派生語は語基に比べて意味・音形ともに増加しそれに伴って頻度が下がるのが普通である (Iacobini 2000: 866)。happyとhappinessを例にとろう。前者は「幸せな」後者は「幸せな状態」という意味であり、後者の方が意味の上でも音形の上でもより複合的である。コーパス<sup>3</sup>における頻度もhappyが7万件弱なのに対してhappinessは1万件ほどである。したがってhappyからhappinessが派生したと判断できる。この非対称的な関係は一般の話者でも直感的に判断できるだろう。

しかし、こうした派生関係をどこまでたどるかは難しい。少なくとも歴史的にはhappy自身も偶然・運を意味する語hapからの派生語だが、それをそのまま母語話者の知識と考えてよいかは検討を要する。逆に、SOSという語がSave Our Shipからできたという、事実とは異なる俗説がある。こうした誤信念はどう扱うのが適当だろうか。

また、語基と派生語の間に方向性があるという前提そのものが疑わしくなるケースもある。名詞のloveと動詞のloveなど転換ないしゼロ派生と呼ばれる関係では、意味や形式はもちろん、頻度差や初出年などに訴えても差が見出せず、派生の方向性が判然としない (Umbreit 2010)。むしろ双方向的に動機づけあっているように感じられるが、こうした場合でも必ず一方の派生を想定しないとイケないのだろうか。

この派生関係は些末な問題ではなく、レキシコンの根幹に関わる。ブルームフィールドによるレキシコンの定義は“an appendix of the grammar, a list of basic irregularities”となっているが (Bloomfield 1933: 274)、ここには無数にある語をすべて記憶するのは不経済・非現実的だという想定がある。不規則なものだけリストし、あとは規則で派生すればよいと考えるわけである。

<sup>3</sup> Corpus of Contemporary American English (COCA)、2018年7月現在。

このアプローチでは「語Xから語Yが派生した」という関係が認められるどうか、Yをレキシコンにリストする必然性の有無に関わることになる。

まとめると、本節では次のような課題が確認された。

- (9) a. 語種:                    どのように学習するのか。なぜ一般化に例外が存在するのか。
- b. 形態素認定:         有意味な最小の要素とは誰にとつてか。
- c. 構成素構造:         なぜ構造が複数とれる事態が生じるのか。それは問題なのか。
- d. 派生関係:           どここまで派生関係をたどるのか。必ず一方向なのか。

### 3. 道具立ての導入

#### 3.1 認知言語学における形態論

まずは日英語に絞った上でごく大掴みに形態論研究史を追う。初期の研究は記述的な性格のものが多かったが (Jespersen 1942, Marchand 1969など)、生成文法の影響を受けデータの一般化が進んだ (Aronoff 1976, Allen 1978, 影山・由本 1997, 伊藤・杉岡 2002など)。より近年では生成文法へのアンチテーゼとして台頭した認知言語学において、意味論や構文研究と比べると下火ではあるものの、認知的な道具立てによる形態論・語形成の研究が少しずつ進んでいる (Ungerer 2002, 2007, 黒田 2003, Tuggy 2005, 上原 2007, Booij 2010, Bybee 2010, Hamawand 2011, 浅尾 2013, Schmid 2015a, Taylor 2015など)。ただし、前節で触れた問題が完全な解決を見るまでには至っていない。

その認知言語学のなかでも、特にラネカーの提唱する認知文法 (Cognitive Grammar) は認知形態論を進めていくうえで重要な考え方を数多く提示している。ここでは以降の議論でも特にポイントとなるもの3つに絞って確認する。1つ目は認知能力の重視、2つ目は使用基盤モデル、そして3つ目は記号的文法観である。

まず1つ目、認知文法はその名の通り、一般的な認知能力との関わりという点から言語現象を説明する。カテゴリー化、スキーマ化、グルーピング、参照点能力、心的走査など多様な能力が言語に関わっている。たとえば言語現象に何らかの一般性が見られるとしても、客観的な所与の規則があると考えのではなく、認識主体が認知能力を働かせた産物、すなわちスキーマによるものとして説明される。このように認知能力を考慮に入れることで形態論の問題にも解決を与えられると示すのが4節の議論である。

2つ目に、言語知識は実際の使用イベントから頻度や文脈といった情報も含めて余剰的かつボトムアップ的に立ち上がるという点を強調するのが使用基盤モデルである (Langacker 2000)。例をあげて説明しよう。英語のなかで *salty / spicy / nutty* といった語は慣習化している。こうした語が実際に使用される事例に繰り返し触れることによって個人の知識としても定着する。またその具体事例に内在している一般性も [[... / N] - [-y / Y]] のようなスキーマとして抽出される。これは語形成のテンプレートにもなる。この例でいうと [... / N] という未指定のスロット

(e サイトと呼ばれる) を任意の名詞で精緻化することで *apricoty* のような新規事例を作り出すことができる (Langacker 1987: 72)。

このモデルでは、接辞 *y* による派生の「規則」とその事例 *salty / spicy / nutty* などが必然的に言語知識として共存することになる。したがって、抽象的な規則を立てるか個別にリストするかは二者択一でなくなる。これは「規則かリストかの誤謬」(rule/list fallacy) と呼ばれる (Langacker 1987: 29)。まったく規則的に導き出せる表現であっても、十分なインプットを受ければ個人の知識に定着しうる<sup>4</sup>。逆に (きわめて当然ながら) いくら不規則・予測不可能であっても、頻度が低ければ、当該の表現がレキシコンに未定着の話者がいて何ら不思議ではない。これは 2.4 節で触れた、レキシコンには不規則な項目のみ最小限リストされると考える立場とは大きく異なる。

これと密接に関連するが3つ目、認知文法において文法は「慣習的な言語単位が構造化されて蓄えられたもの」(a structured inventory of conventional linguistic units) と規定される (Langacker 1987: 57)。これは *cat* のように単純で特定の項目から SVOO など複合的かつスキーマ的な構造までを包括する規定であり、そのどれもが一貫して形式と意味のペアからなる記号であると見なされる。この記号的文法観からの帰結が、レキシコンと狭義の文法は明確な境界の引けない連続体だという主張である<sup>5</sup>。これは、文法と区別される独立の部門 (ブルームフィールドの言い方では appendix) としてレキシコンを考える立場と対照的である。

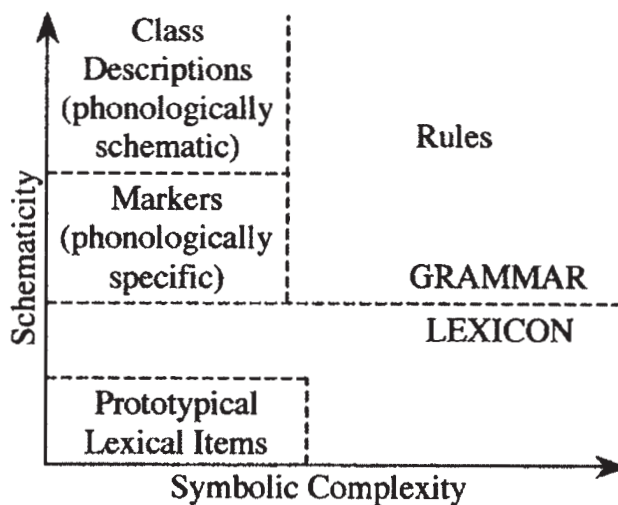


図 1: 語彙・文法の連続体 (Langacker 2008: 21)

<sup>4</sup> この余剰性を支持する実験的証拠は Taylor (2012: 127-133) で簡潔にまとめられている。

<sup>5</sup> なお、本稿と同じく「認知形態論」を掲げる黒田 (2003: 116-7) はこれを評して「形態論無用論に傾いている」「形態論を始める前に終わらせるような奇妙な還元主義」としているが、ここには誤解があるように思われる。黒田は根拠の1つとして Langacker (1987: 82) を引き「形態論的構成体と統語論的構成体とのあいだに根本的な区別はなく、あらゆる面で完全に並行的である」と訳している。これだと極端な立場にも思えるが、原文では in all immediately relevant respects という留保のついた穏当な書き方をしている (強調は引用者による)。

### 3.2 素朴知識・素朴理論

本節では素朴知識・素朴理論を導入する。これを明示的に取り入れた研究は多くないが、認知言語学とは親和性が高く、今後、認知形態論を推し進めていく上でも欠かせない観点と考えられる。

人間のもつ知識には個人差がある。一般人がもつ知識と専門家のそれは内実が大きく異なる。一般の人が自らの経験の範囲で獲得する知識を「素朴知識」という。これは宣言的知識だけでなく非明示的な知識も含む (Lakoff 1987: 118)。なかでも比較的一般性の高いものを「素朴理論」と呼ぶ。これらは専門家が実験や文献調査などを経てたどり着く専門知識からは区別される。

物理学で考えよう。通常、一定の年齢以上であれば「視界から消えた対象も存在し続ける」という対象の永続性を理解しているだろう。まだここでは素朴知識と専門知識の区別が顕在化しない。では「重い物の方が速く落下する」はどうだろうか。こうした信念はありふれており、多くの人のなかで素朴理論となっているが、もちろん専門的知見からすれば誤っている (箱田ほか 2010: 382)。このように両者が一致しないことがある以上、専門知識を素朴知識と同一視することは妥当でない。専門的知見が素朴知識になっているとは限らず、また専門知識に照らせば誤りと見なされるような信念が素朴に抱かれていることもあるわけである。

この区別は言語記述においても認識はされてきた。たとえば語源研究では、文献的な裏づけのある語源と民間語源<sup>6</sup>とが区別されている。たとえば「あかぎれ」は「あ(足) + かがり」という起源であることが文献調査から分かっているが、素朴には「赤 + 切れ」と感じられる。また *surround* は本来 *super-undare* という構造で「溢れる、氾濫する」という意味だったが、*sur-round* と分析された結果、*round* に釣られて「取り囲む」という意味になっている。このように民間語源は語形や意味などが変わる一因になるため、単に不正確な知識として言語学の対象から切り捨てることはできない。むしろ積極的に記述するだけの価値がある。

多義性と同音異義性の判断でも通時的事実と素朴な感覚が区別されている。歴史的に言えば耳を表す *ear* と穂を表す *ear* は別語だが、共時的には関連が感じられ、多義として扱われる。逆に歴史的には同一語であっても、花の *flower* と小麦粉の *flour* など、関連が感じられなければ同音異義とされる (詳細は Ullmann 1951)。

民間語源と多義から、語を動機づけのあるものとして見ようとする素朴理論が見えてくる<sup>7</sup>。これをウィークリーは「なじみのない語を『何か似たものに見せよう』とするのは、おそらく人間の本能にほかならないであろう」と表現している (Weekley 1912: 118 邦訳 p. 264)。これに則って、たとえば全体として初見の語であっても既知語と部分的な関連がないか探索される。うまく機能している限り、そのようなプロセスが働いていることすら気づかれないが、意味や音形が変化したり無関係の別語が結びつけられたりすると、それが発覚するわけである。

この動機づけを求める素朴理論は、表現を理解するときだけでなく語形成に際しても働く。

<sup>6</sup> ここでいう民間語源とは一般の話者が素朴に抱く語源意識 (およびそれに伴う言語変化) のことであり、分析者による無根拠で強引な説明 (*lucus a non lucendo*) のことではない。

<sup>7</sup> ちょうど逆のプロセス「恣意性への流れ」(*drift for arbitrariness*) も存在が指摘されている (Tomasello 2008: 220)。

たとえば、他の語とまったく関連のない「無からの語根創造」(ex nihilo root creation) は定義上意味が推論できず認知的に不経済なため (Schmid 2015a: 69)、何かを名づける際に既存語と同じ音形を持たせることがある。社名の「研究社」は慣習的な語である「研究者」と、企業などが一個人を相手取って行う恫喝的な訴訟 *SLAPP* (<*Strategic Lawsuit Against Public Participation*) は平手打ちを表す慣習的な語 *slap* と同じ音形 (および連想的意味) を持つため容易に記憶される<sup>8</sup>。あくまで一例にすぎないが、こうした素朴理論を随所に働かせることで言語知識は形作られていると考えられる。

整理しよう。一般の話者の言語知識を明らかにすることを目指す限り、記述・説明の対象は素朴知識である。その内実は専門知識と部分的に重なるが、安易に同一視するべきではない。また、素朴知識のなかでも一般性の高い素朴理論は言語の理解・産出の両面で貢献している。以下、これらの道具立てを援用することで2節の問題が自然に解消されることを示す。

## 4 問題の解消

### 4.1 語種

2.1節では語種について学習可能性と一般化の例外の存在という2つの問題を提起した。それぞれ非言語の例を参照しながら検討しよう。

明示的に教わずとも一般の話者に語種の知識があるように思えるのはなぜか、というのが学習可能性の問題だった。これはカテゴリー化能力に帰されるものと主張する。まず非言語に対するカテゴリー化から考えよう。人間はメダカやスズメなどの事例にある程度触れると、カテゴリー化の能力により「泳ぐ」「飛ぶ」などを特徴抽出 (feature extraction) し、初めて見る対象でも魚や鳥などと正しく判断できる。

言語に対しても音素の認識から文の容認性判断まであらゆるレベルで多様なカテゴリー化が起きているといえる。語のレベルで考えると、たとえば、どういう音ないし文字の連鎖が女性名かということは教わずとも身につけている。大量に触れてきた例から女性名のスキーマが抽出され、無自覚のうちに素朴理論が成立しているからと考えられる (日本人であれば「共鳴音が多い」「『子』で終わる」「2~3モーラである」など)。結果的に「まゆ」や「なおこ」などが女性名であると正しく判断することができる。

語種概念も同様に考えることができる。「音節数が少ない」「日常語である」などの基準でまとめられたカテゴリーは専門知識という本来語とおおむね合致し、その逆は外来語とかなり重なるだろう<sup>9</sup>。こうしたカテゴリー化を行っているため、専門的な語種の知識を身につけているように思えるわけである。これが学習可能性の問題の答えになる。

例外の存在の議論に移る。結論を先取りすると、あくまで素朴理論による柔軟なカテゴリー化であるため専門知識と素朴知識にずれが生じる、ということになる。類型としては、(i) 理解の際にずれが生じる場合と、(ii) 拡張的な産出でずれが出る場合の少なくとも2パターンがある。

<sup>8</sup> 一般にバクロニム (backronym) と言い、元になる既存語を Ungerer (2007: 658) は支柱語 (prop word) と呼ぶ。

<sup>9</sup> 語種判断で用いられる種々の基準については Pinker (1989: 121) や Adams (2001: 12) などに言及がある。



クジラを魚と思ひ込む、小野妹子を女性と勘違いするなどの例は前者に当たり、鳥の素朴知識を参照して強欲な人をハゲタカに見立てる、人名から抽出した特徴を活かして「大食い痩せ子」といった疑似人名を作るなどの例は後者に対応する。

語種もこれとパラレルになっている。「オクラ」はいわゆる和語のように感じられるが外来語である。*deed*と*action*ではフォーマルな*deed*の方が本来語で、日常語の*action*が外来語である (Jespersen 1905, §101)。これらは (i) のタイプである。また (ii) 素朴理論を活用した意図的拡張もある。フロント名のメイリオ、動物園・水族館の複合施設ニフレルなどは疑似外来語であり「明瞭」「~に触れる」に由来する。英語でも*absquatulate* (慌てて逃げる)、*conundrum* (難問)、*discombobulate* (~を混乱させる)、*hocus-pocus* (ごまかし) など疑似ラテン語が散見される<sup>10</sup>。

こうしたずれが一因で一般化に例外が生じると考えられる。連濁の例外であげた「綺麗」「かると」はいずれも日常語であり、専門知識でいうところの和語のように意識されている。外来語の特徴を捉えて*talkative*や乙女チックなどを意図的に作るとこれも例外を生む。こうした例は素朴理論に基づくカテゴリー化の自然な帰結である。専門的な語種とは独立にカテゴリー化をした結果、語種に近似する知識ができていただけといえる。乖離が露見するのは分析者の俯瞰的な観点を採るからであって、素朴知識の中では一貫している。

本節では、素朴なカテゴリー化によって語種の学習可能性と一般化の例外を説明した。

## 4.2 形態素認定

2.2節では形態素が有意味な最小要素と規定されることを確認した。認知文法の言い方では「複合度がゼロの記号」となる (Langacker 2008: 16)。こうした規定を徹底すると、どうしても認定に個人差が生じる。最小とは「それ以上分けられない」という(不)可能概念であり、そこに対象のアフォーダンスと行為者のエフェクティビティ両方が関わるためである<sup>11</sup>。たとえば10kgのカバンを持ち上げる課題はできる人とできない人がいる。カバンの重量だけでなく行為者の腕力も加味する必要がある。語内部の要素を有意味なものとして切り出す課題、すなわち形態素認定も同様である。語の側に分解されるほどの複合度があるか、話者の側に分解に要する教養や創造性などのスキルがあるか。両者を総合的に考える必要がある。

話者側に一定の教養があれば*Wednesday*の前半が*Woden*という神の名前だと分かるだろうし、ビー玉の「ビー」にもビードロを見て取れるだろう。それができる人にとっては明確に形態素である。直感の鋭さや創造性も形態素の認定に関わることを*alcoholic*で見よう<sup>12</sup>。語頭の*al-*がアラビア語の定冠詞と明示的に知らなくても、*alchemy* / *algebra* / *algorism* / *alkali* / *Al-Qaeda*などの系列関係から*al-*が有意味だと察する鋭い話者がいて不思議はない。また、創造力を働かせれば

<sup>10</sup> 疑似外来語に関して、日本語の例は米川 (2018: 第1章)、英語の例は原口 (1982)などを参照のこと。

<sup>11</sup> アフォーダンスを言語分析に取り入れた研究には仲本 (2004) や本多 (2005) がある。これらは世界に対するアフォーダンス知覚の言語的現れを主に論じている。本稿の主張は、言語表現自体にもアフォーダンスがあり、個々の主体がそれをピックアップしているというものである。

<sup>12</sup> トマセロの用語を使うと、教養による分解には意図的アフォーダンスが、創造性での分解には自然的・感覚運動的アフォーダンスが関わっている (Tomasello 1999: 84-87)。

-*holic*を接尾辞的に切り出すこともできる。そうした話者は現に存在し、*chocoholic*などの語が生じている<sup>13</sup>。ただし言語知識は個人がさらされてきたインプットに応じて立ち上がるため、分析できない語として*alcoholic*を捉えている話者も存在する。その本人にとっては*alcoholic*が丸ごとひとつの形態素となる。

これは形態素の相対論である。もちろん、形態素として大多数の話者が合意する例はある。だがそうした公共性は程度問題である。どこまでが形態素で、どこからが単なる誤解とされるのか。何を基準に、誰が判断するのか。厳密な線引きは不毛である。たとえば一部の幼児はクロワッサンの「クロ」を形態素と認識しており、類推で「茶色ワッサン」という語を作ることがある<sup>14</sup>。これは創造性による切り出しであり、公共性は著しく低い。より微妙な例では、*niggardly* (ケチな) という語の内部に、本来は無関係の差別語*nigger*を感じ取る話者が一定数いる (Garner 2016: 627)。はたしてこれは形態素だろうか。形態素の認定に、話者の教養・鋭さ・創造性といったスキルの個人差も加味した相対論をとることで、こうした判断のゆれの存在を自然に捉えることができる。

クランベリー形態素の検討に移ろう<sup>15</sup>。*Wednes*の意味を知らない話者にとって、*Wednesday*は影山のいうように分析されない一語なのだろうか。必ずしもそうではないと思われる。知識を個人の脳内ではなく共同体に帰属させる見方 (分散認知ないし社会的認識論 cf. 戸田山 2002, 2016) を採ることで、より直感に沿った分析ができる。具体例を見よう。

まず非言語の例から考えると、相対性理論がどういう内容なのか正確に把握している人は多くないだろう。個人の知識は限定的である。こうした専門的概念は物理学者に知識を委任し、詳細な内実には知らないままその存在を受け入れているのである。これを念頭に置いて、言語の例に移る。個人的に「AO入試」のAOが何を意味するのか知らないとしよう。それでも調べれば意味が分かるはずと思い、「AO」と「入試」で区切れそうな直感も働くだろう。AOの意味が説明できないからといって分析されない一語扱いするのは不合理である。そうすると*Wednesday*なども、有意味に区切れそうだと感じられる限りで形態素に分解されるとみてよい。意味の詳細は辞書や専門家に託しているのである。もちろんプロトタイプ的な形態素ではなく周辺例ということになる。

もうひとつ、複合的な言語表現について重要なのは、適切に使用している限りにおいて部分の理解がどうあろうと実質的に何の違いもないという点である。語とは単なる形態素の集積ではなくゲシュタルト性を帯びている<sup>16</sup>。部分を意識しているかどうか、正しい理解かどうか、

<sup>13</sup> これは破片辞 (splinter) などと呼ばれ、類例には *marathon* に由来する *-thon* から *telethon* ができるなどがある。詳細は Bauer et al. (2013: 525-530) や Callies (2016) を参照されたい。

<sup>14</sup> 『朝日新聞』2003年4月4日 朝刊 22面「あのね—子どものつづやき」欄。なおこの種の認識は次第に訂正されるものと思われる。言い換えると、クロワッサンの「クロ」を「黒」として切り出さなくなるというのは、共同体の中で意図的アフォーダンスを身につけるということである。

<sup>15</sup> Langacker (2009: 26ff.) は欠格構文 (defective constructions) と分析する。本節の議論はこれと整合的である。

<sup>16</sup> 同じ趣旨の内容を Langacker (2000: 132) は次のように述べている。

(i) [M]orphemes are abstracted from words. [...] By and large, it seems fair to say that speakers are more intuitively aware of words than of their parts, and that large numbers of complex forms are initially learned as wholes and analyzed only subsequently (if at all). Words, then, have some claim to primacy.

これらは全体を適切に使用してさえいけば問題とならない。これはロゴの入ったTシャツとのアナロジーで考えることもできる。Tシャツ全体は着用が主眼である。着る目的で使っている限り、部分であるロゴの解釈に差があったところで問題はない。本来ナイキのロゴ (Swoosh) は彫刻サモトラケのニケの翼の意匠である。それを知っていようがまいが、あるいは「眉毛のデザインだろう」などと誤解していようが、他のロゴTシャツと区別して着用している限り不都合は生じない。ゆえに解釈の個人差も顕在化しない<sup>17</sup>。

まとめると、形態素とは表現の複合性と話者のスキルが関わる相対概念である。有意味とは誰にとってかという問題について、この話者相対論と社会的認識論によって解答を示した。

### 4.3 構成素構造

構成素構造は一意に決まらないことがある。形態素が話者相対的なため、それを部分とする構成素構造も絶対的ではないのである。話者によって、あるいは同一話者でも注意の向け方によって言語表現の構造は変わる。これは端的な事実であり、論点はそれが問題ないしパラドクスと言えるどうかである。ここで2つのタイプを区別しよう。構成素構造の取り方により全体としての意味が大きく変わるタイプ1と、いずれの取り方でも大差ないタイプ2である。これらに対応する非言語の例とあわせて確認する。

ある種の多義図形が非言語のタイプ1に該当する。下図では、どこをまとまりとして捉えるかによって全体の見え方、相貌が一変する。ABを先にまとめると若い女性の横顔に見え、BCを先にまとめると老女が浮かび上がる。また非言語にはタイプ2もある。母、息子、嫁からなる家族を考えよう。この成員をグルーピングする仕方は複数あるが、親子プラス嫁と見ても、母プラス息子夫婦と見ても、いずれも全体像は同一の家族である。複数の構造が考えられるからといってそれが問題とは限らない。同一の対象に複数の捉え方(ここではグルーピング)を適用するという、汎用的な認知能力の発現として自然に分析することができる。



図2: W.E.ヒル「妻と義母」(一部改変)

<sup>17</sup> この議論は後期ウィトゲンシュタインによる意味の使用説に影響を受けている。ウィトゲンシュタインと認知言語学の関係については Langacker (1987: 5, 2015: 57)、西村・長谷川 (2018: 19 注11) などを参照されたい。

言語にも両タイプがある。まずタイプ1として次の例を見よう (強調は引用者)。

(10) タイプ1: 通時的な再分析

- a. Usually so mentally attuned, so aware of what she was thinking and feeling, he looked angry and **nonplussed**, unable to understand her withdrawal. (BNC 1992)
- b. And while many of us might be a little taken aback if Mom showed up at our offices, Secrist is utterly **nonplussed**, even happy about it. (COCA 2002)
- c. そうした理が具体的にあらわされたものが、「礼儀法度」であるから、人は**すべからく**その礼秩序にしたがわねばならない (BCCWJ 2006)
- d. やりきれんねえ。何もかも**全からく**。まあ、それでも生きてゆく事に変わりはないのだけれど。 (Twitter 2012)<sup>18</sup>

(10a) の *nonplussed* は「動揺した」という意味であり、*nonplus* に *-ed* がついた構造である。(10b) は「動じない」と取れる確例である。「動揺した」という意味が *plussed* に移り<sup>19</sup>、それを *non* が否定するという再解釈が起きている。(10c) の「すべからく」は本来「するべき、当然」という意味のク語法である。一転 (10d) では「すべ」に動機づけが見出され「すべて」を表している。

(11) タイプ1: 歌詞の異分析

- a. laid him on the green > Lady Mondegreen “The Bonnie Earl O’ Moray”
- b. 思い込んだら > 重いコンダラ 「ゆけゆけ飛雄馬」

歌詞の異分析はモンデグリーンとも呼ばれ、豊富な例がある (Garner 2016: 603)。相互の理解がリアルタイムで調整される対話ではないことに加え、歌詞は命題内容の伝達より口ずさんで楽しむという点に主眼があるため異分析が発覚しにくいのである<sup>20</sup>。

曖昧性を生む (10) のような例を見ると、構成素構造の一義的決定がきわめて重要かのように思える。だが歌詞の例では解釈の違いが大きな問題につながらないし、さらに例を見ていくと、実質的に意味の変わらないタイプ2もありふれている。

(12) タイプ2

- a. [Alice [likes liver.]]            [[Alice likes] liver.]
- b. [[a lot] of]                        [a [lot of]]
- c. [under-[cooked]]                [[undercook]-ed]

<sup>18</sup> <https://twitter.com/HondaDaisuke/status/181237924833140736> (最終確認日 2018 年 6 月 19 日)

<sup>19</sup> これは携帯電話を「携帯」、capital city を *capital* と呼ぶなどの例における「意味の伝染」(semantic contagion) という現象の亜種として見ることができる。

<sup>20</sup> なお、認知言語学では暗記していれば歌詞も語彙項目と見なされる (西村・野矢 2013: 35)。特定性・複合性ともに高いため、図1「語彙・文法の連続体」では右下に位置づけられる。

まず文レベルだと、たとえば*Alice likes liver.*は意味を大きく変えず右枝分かれにも左枝分かれにも取れる。前者を想定する方が普通だが、話題化構文などでは後者が支持される (Langacker 1986: 35)。句のレベルでも*a lot of*は複数の取り方がある (cf. *a lotta*)。これが語のレベルで生じているのが先に見た*untruthful*や*undercooked*である。日本語で考えても「ねまき」は [[寝[巻き]] と [[寝間]着] の両方あるが、形態素境界をどちらと見ても全体の意味はいずれも変わらずパジャマである。

やや種類は異なるが*There was a farmer had a dog.*など共有構文 (apo koinou) と呼ばれる例や (Lambrecht 1988)、「先祖の墓参り」など句の包摂と呼ばれる例 (影山 1999: 333)、さらに*guesstimate* (*guess* + *estimate*) や「ヘドロ」(反吐 + 泥) など混成ないしカバン語 (*portmanteau*) の例も考えよう。いずれも構成素構造が部分的にオーバーラップしている。これらはみな注意の焦点を徐々にずらすことで理解が可能になると考えられる (Langacker 2016: 408)。

完全な合成性を前提にしたビルディングブロック・メタファーに依拠すると、構成素構造が不確定である*untruthful*や重複している*guesstimate*などは問題となる (Langacker 1991: 508)。一方認知文法は、部分から全体の意味が完全に予測されるという強い主張ではなく、全体を動機づける足場 (*scaffolding*) や飛び石 (*stepping stone*) として部分を捉えているため、これらは問題にならない (Langacker 1987: 461, 2008: 165)。本節の議論を整理すると以下ようになる。

表 1: 複数の構成素構造

	タイプ 1	タイプ 2
非言語	[[A-B]-C] / [妻]	[[A-B]-C] / [家族]
	[A-[B-C]] / [義母]	[A-[B-C]] / [家族]
言語	[[nonplus]-ed] / [動揺した]	[under-[cooked]] / [調理不十分]
	[non-[plussed]] / [動じない]	[[undercook]-ed] / [調理不十分]

#### 4.4 派生関係

派生関係においても素朴知識と専門知識の区別が混乱の解消に有効である。専門概念としての語基がそのまま素朴知識としてあるわけではない。だが*happy*と*happiness*には非対称的な関係が感じられる。これは認識の基準となるベースラインとその精緻化という一般的な概念とほぼ一致するからと考えられる (Langacker 2016)。ある二語間に形式と意味の上で密接なつながりが感じられるとき、形式が短い方や頻度の高い方をベースラインとする素朴理論があると考えられる。

繰り返しになるが、専門的知見が一般の話者にも共有されているとは限らず、誤った知見が流布していることもある。2節の例でいうと「hapから*happy*が派生した」は基本的に前者に<sup>21</sup>、

<sup>21</sup> ただ現代英語にも名詞から接辞-yで形容詞を作る語形成パターン自体は存在し、*perhaps* / *happen* / *hapless* / *haphazard* / *mishap* など *hap* を含んだ語も散見されるため、派生関係に気づく鋭い話者の存在は否定されない。

「*Save Our Ship*から*SOS*が派生した」というのは後者に対応する。このほか*edit*と*editor*では上記の素朴理論により、より短い*edit*から*editor*ができたと感じることになる。通時的には*edit*は逆成された形式であるため、ここにも専門知識と素朴知識の乖離が生じている。

さらに*love*の名詞・動詞用法は形式に差がなく頻度も同程度である。この場合、派生の前後は決められない。そもそも認知形態論は余剰を排したレキシコンという前提を共有していない。慣習性に差のない*love*のようなペアは単に互いに動機づけあっていると考えるのが自然であり、無理に一方に還元する必要はない。

まとめると、派生関係をどこまでたどるかという問題は、母語話者の言語知識を解明の対象に据える限り、素朴知識の範囲内にとどめるということになる。派生の一方向性も認知形態論では必須の要請ではない。

## 5. まとめ

本稿では形態論上の概念である語種、形態素、構成素構造、派生関係をめぐって、これらが抱える諸問題を検討し、認知言語学で周知のスキーマ化、カテゴリー化、グルーピングなどの能力および素朴理論という道具立てを用いて解消できることを示した。

専門知識は記述・説明の「手段」として用いる分には何の問題もない。現に本稿でもアフォーダンスなどを分析に取り入れている。しかし記述や説明の「対象」として、つまり母語話者の素朴知識として見なすことには慎重である必要がある。今後、具体的な語形成プロセスの研究などに移るにあたって、分析者の観点と話者の観点を区別に意識的であることが有益だと思われる。

## 参考文献

- Adams, Valerie (2001) *Complex words in English*. Harlow, Essex: Longman.
- Allen, Margaret (1978) *Morphological investigations*. Unpublished doctoral dissertation, University of Connecticut.
- Aronoff, Mark (1976) *Word formation in generative grammar*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- 浅尾仁彦 (2013) 「認知形態論」 李在鎬・村尾治彦・浅尾仁彦・奥垣内健『認知音韻・形態論』(認知日本語学講座 第2巻) 53-87. 東京: くろしお出版.
- Bauer, Laurie, Rochelle Lieber, Ingo Plag (2013) *The Oxford Reference Guide to English Morphology*. Oxford: Oxford University Press.
- Bloomfield, Leonard (1933) *Language*. New York: Holt.
- Booij, Geert (2010) *Construction morphology*. Oxford: Oxford University Press.
- Bybee, Joan (2010) *Language, usage and cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Callies, Marcus (2016) Of soundscapes, talkathons and shopaholics: On the status of a new type of formative in English (and beyond). *Language typology and universals* 69: 495-516.

- Dixon, Robert (2014) *Making new words: Morphological derivation in English*. Oxford: Oxford University Press.
- Don, Jan (2014) *Morphological theory and the morphology of English*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Garner, Bryan (2016) *Garner's Modern English Usage*. Fourth edition. Oxford: Oxford University Press.
- Gundersen, Helge (2001) Building blocks or network relations: Problems of morphological segmentation. In: Hanne Gram Simonsen and Rolf Theil Endresen (eds.) *A cognitive approach to the verb: Morphological and constructional perspectives*, 95-127. Berlin / New York: Mouton de Gruyter.
- 箱田祐司・都築誉史・川畑秀明・萩原滋 (2010) 『認知心理学』 東京：有斐閣。
- Hamawand, Zeki (2011) *Morphology in English: Word formation in cognitive grammar*. New York: Continuum International Groups.
- 原口庄輔 (1982) 「マカロニ語 (Macaronics) の諸相」『ことばの文化』223-241. 東京：こびあん書房。
- 本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論：生態心理学から見た文法現象』 東京：東京大学出版会。
- Iacobini, Claudio (2000) Base and direction of derivation. In: Geert Booij, Christian Lehmann, Joachim Maugdan (eds.) *Morphology: An international handbook on inflection and word-formation*, 865-870. Berlin: Walter de Gruyter.
- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』(英語学モノグラフシリーズ6) 東京：研究社。
- Jespersen, Otto (1905) *Growth and Structure of the English Language*. Leipzig: Teubner.
- Jespersen, Otto (1942) *A modern English grammar on historical principles, Part VI: Morphology*. Copenhagen: Ejnar Munksgaard.
- 影山太郎 (1999) 『文法と語形成』(日本語研究叢書 第2期第4巻) 東京：ひつじ書房。
- 影山太郎 (2005) 「形態論」日本語教育学会 (編) 『新版 日本語教育事典』569-570. 東京：大修館書店。
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』(日英語比較選書8) 東京：研究社。
- 木村一・鈴木功眞・吉田光浩 (2012) 『語と語彙』(日本語ライブラリー) 東京：朝倉書店。
- 黒田航 (2003) 「認知形態論」吉村公宏 (編) 『認知音韻・形態論』79-153. 東京：大修館書店。
- Lakoff, George (1987) *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lambrecht, Knud (1988) There was a farmer had a dog: Syntactic amalgams revisited. *Berkeley Linguistics Society* 14: 319-339.
- Langacker, Ronald (1986) Introduction to cognitive grammar. *Cognitive Science* 10: 1-40.
- Langacker, Ronald (1987) *Foundations of cognitive grammar. Vol. 1: Theoretical prerequisites*.

- Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald (1991) *Foundations of cognitive grammar. Vol. 2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald (2000) A dynamic usage-based model. In: Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.) *Usage-based models of language*, 1-63. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald (2009) *Investigations in cognitive grammar*. Berlin / New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald (2015) On grammatical categories. *Journal of Cognitive Linguistics* 1, 44-79.
- Langacker, Ronald (2016) Baseline and elaboration. *Cognitive Linguistics* 27: 405-439.
- Marchand, Hans (1969) *The categories and types of present-day English word-formation. A synchronic-diachronic approach*. Second edition. München: Beck.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法：改訂版』東京：くろしお出版.
- Müller, Peter, Ingeborg Ohnheiser, Susan Olsen and Franz Rainer (eds.) (2015) *Word-formation. An international handbook of the languages of Europe. Vol. 1*. Berlin / Boston: De Gruyter Mouton.
- 仲本康一郎 (2004) 「認知意味論に基づく属性表現の意味解釈のメカニズム」京都大学博士論文.
- 西村義樹・野矢茂樹 (2013) 『言語学の教室：哲学者と学ぶ認知言語学』東京：中央公論新社.
- 西村義樹・長谷川明香 (2018) 「認知言語学のどこが「認知的」なのだろうか？」高橋英光・野村益寛・森雄一 (編) 『認知言語学とは何か?』東京：くろしお出版.
- 野中大輔・堀内ふみ野 (2016) 「underestimate とは言っても underheat とは言わないのはなぜか：動詞接頭辞 over-と under-の対比から」日本言語学会第 125 回大会予稿集, 192-197.
- Pinker, Steven (1989) *Learnability and cognition: The acquisition of argument structure*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Plag, Ingo (1996) Selectional restrictions in English suffixation revisited: A reply to Fabb (1988). *Linguistics* 34, 769-798.
- 斎藤純男・田口善久・西村義樹 (編) (2015) 『明解言語学辞典』東京：三省堂.
- Schmid, Hans-Jörg (2015a) *English morphology and word-formation: An introduction*. Third, revised and enlarged edition. Berlin: Erich Schmidt Verlag.
- Schmid, Hans-Jörg (2015b) The scope of word-formation research. In: Müller et al. (2015) 1-21.
- Taylor, John (2012) *The Mental Corpus: How Language is Represented in the Mind*. Oxford: Oxford University Press.
- Taylor, John (2015) Word-formation in cognitive grammar. In: Müller et al. (2015) 145-158.
- 戸田山和久 (2002) 『知識の哲学』(哲学教科書シリーズ) 東京：産業図書.
- 戸田山和久 (2016) 「知識」野家啓一・門脇俊介 (編) 『現代哲学キーワード』(有斐閣双書) 45-65. 東京：有斐閣.
- Tomasello, Michael (1999) *The cultural origin of human cognition*. Cambridge, MA.: Harvard



University Press.

- Tomasello, Michael (2008) *Origins of human communication*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Tuggy, David (2005) Cognitive approach to word-formation. In: Pabol Štekauer and Rochelle Lieber (eds.) *Handbook of word-formation*, 233-265. Dordrecht: Springer.
- 上原聡 (2007) 「認知形態論」上原聡・熊代文子『音韻・形態のメカニズム』(講座 認知言語学のフロンティア) 153-209. 東京: 研究社.
- Ullmann, Stephen (1951) *The principle of semantics*. Oxford: Basil Blackwell.
- Umbreit, Birgit (2010) Does *love* come from *to love* or *to love* from *love*? Why lexical motivation has to be regarded as bidirectional. In: Alexander Onysko and Sascha Michel (eds.) *Cognitive perspectives on word formation*, 301-333. Berlin / New York: De Gruyter Mouton.
- Ungerer, Friedrich (2002) The conceptual function of derivational word-formation in English. *Anglia* 120, 534-567.
- Ungerer, Friedrich (2007) Word-formation. In: Dirk Geeraerts and Hubert Cuyckens (eds.) *The Oxford handbook of cognitive linguistics*, 650-675. Oxford: Oxford University Press.
- バンス, ティモシー・金子恵美子・渡邊靖史 (2017) 「序説」ティモシー・バンス・金子恵美子・渡邊靖史 (編)『連濁の研究: 国立国語研究所プロジェクト論文選集』1-23. 東京: 開拓社.
- 米川明彦 (2018) 『ことばが消えたワケ: 時代を読み解く俗語の世界』東京: 朝倉書店.
- Weekley, Earnest (1912) *The romance of words*. London: John Murray. [寺澤芳雄・出淵博 (訳) (1987) 『ことばのロマンス』岩波文庫.]

## コーパス

- Davies, Mark (2004-) *BYU-BNC*. (Based on the British National Corpus from Oxford University Press). Available online at <http://corpus.byu.edu/bnc/>
- Davies, Mark (2008-) *The corpus of contemporary American English: 560 million words, 1990-present*. Available online at <http://corpus.byu.edu/coca/>
- 国立国語研究所 (2011) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) 検索アプリケーション「少納言」<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>

# Folk Theory and Cognitive Morphology

HAGISAWA Daiki

hagisawa\_daiki@yahoo.co.jp

Keywords: cognitive linguistics, morphology, lexicon, folk theory

## Abstract

The present article addresses, in terms of cognitive linguistics, some morphological concepts, i.e., vocabulary strata, morpheme, constituent structure, and derivational relation. They each have problems such as learnability and indeterminacy. They stem from a confusion of two types of knowledge: folk and technical one. Usage-based plus folk theoretic approach makes the problems vanish.

(はぎさわ・だいき 神戸市外国語大学大学院)